

新設子育て支援施設における新人支援者の心理的変化

立本 千寿子

要約

Y短期大学では、平成16年度より、地域子育て支援研究所が設立され、平成22年度からは、地域の親子が週に数回自由に来校して支援を受けることが出来る子育て支援施設を開始した。同時に、同じ地域性に所在する私立保育園において、出張形式の地域支援を開始した。それらの支援を、2名の新人支援者が展開している。

そこで本研究では、大学が運営する上記の子育て支援に関して、新人支援者を対象に実施した継続的な質問紙調査を通して、その回答や記述から、新人支援者の経月比較にみる、支援を通じた心理的変化を明らかにすること、また、それらの経月比較を通して、支援における課題を明らかにすることを目的とした。

その結果、それぞれの新人支援者の様々な心理的変化の特徴が明らかになった。また、「支援の限度の基準化」、「支援を行う上で必要な知識や実務の習得及び向上」、「実態から見えてくる支援におけるシステム作り」等の課題が明らかになった。

キーワード：子育て支援，新人支援者，地域支援，心理的変化，経月調査

I 研究の背景と目的

現代の子育ては、親にとっても子にとっても様々な課題を抱えている。子育ては、始まると中断しにくい旅路であると言える。その旅路で、様々な喜びや苦悩を経験するのだが、その中で、苦悩を強く感じ、喜びを見出したり感じたりしにくくなる時期もある。

牧野（2010）は、「子どもの現状や将来あるいは育児のやり方などについての漠然とした恐れを含む情緒の状態」を「育児不安」と呼び、その実態を1980年代に問題にした。その後、育児不安に関して、多くの研究結果に共通していることは、父親の育児参加が少ない場合に、また母親の地域でのネットワークが狭い場合に、母親の育児不安は強まることが確かめられてきたと述べている。

そのような子育ての難しさの中、周りの人間が子育てを支援しようという取り組みが行われてきた。その子育て支援は、内容の多様性と方法の多様性も含め、バリエーション豊かに、様々な所で取り組まれてきている。最近では、有志が結成したNPO法人や、地域の仲間が結集するなどのように、気軽に支援を出来るというような風潮になってきた。

子どもと子育てを応援する社会の実現に向けて、子育て支援の総合的な姿と将来の数値目標などを定めた「子ども・子育てビジョン」が2010年1月29日に策定された。ビジョン策定に

あたっの基本的な考え方は、大きく分けて、「1. 社会全体で子育てを支える」「2. 『希望』がかなえられる」という2つの柱から構成されている。「1. 社会全体で子育てを支える」においては、さらに3つの考え方を示しており、「子どもを大切にする」「ライフサイクル全体を通じて社会的に支える」「地域のネットワークで支える」となっている。また、「2. 『希望』がかなえられる」においても、同様に3つの考え方が示されており、「生活、仕事、子育てを総合的に支える」「格差や貧困を解消する」「持続可能で活力ある経済社会が実現する」となっている。また、これらの子ども・子育て支援策を実施する上で大切な「3つの姿勢」が示されており、「1. 生命（いのち）と育ちを大切にする」「2. 困っている声に応える」「3. 生活（くらし）を支える」となっている²⁾。

実際に、子育て支援ではどのようなことが出来るのであろうか。勝浦（2005）は、（House,1981）の概念規定に従って、支援内容を情緒的支援（地域全体で子どもに目を配る・相談にのる・他の親との交流等）、道具的支援（必要に応じて手助け・用事がある時休みたい時預かる）、情動的支援（子育ての情報）、評価的支援（専門家から子育ての意見）に分類している³⁾。また、大豆生田（2008）は、子育て支援の3つの視点として、「親や家族を支えるための支援」「子どもの健全な育ちを支える支援」「支え合いを形成する社会的・制度的支援」の3つを挙げている⁴⁾。

子育て支援に関する調査の一つとして、片川（2003）は、全国の子育て支援センターで行われている子育て支援の内容に注目し、現状と課題について検討を行っている。その中で、子育て支援に対するニーズは地域によって異なるにも関わらず、子育て支援センターで行われている支援の内容は、全国的に類似していることを指摘している。そして、子育てには地域性があるため、子育て支援も地域の支援ニーズをふまえ、内容を考案していく必要性を述べている⁵⁾。また、無藤ら（2005）は、子育て支援に関連する研修のニーズ及び評価についての調査研究を通して、子育て支援の拡がりの中で必要とされる資質・技能・知識として、「子育て支援をめぐる基本的な知識」「子どもの発達をめぐる知識」「子どもの発達上の問題とその対処への知識・技能」「子どもへの接し方の技能」「地域援助の技能」の5つを提言している⁶⁾。そして、子育て支援者に求められる資質として、①保育者の資質以上に、社会・地域・文化など生活ぐるみ、親と子の置かれた状況を多角的に理解する資質②相談に関する思想と不可分に結合した技能③子どもの発達や障害についての適切な知識と地域を育てる視点を持ち、専門機関との連携をはじめとして、対症療法的にではなく地域を発達環境にしていくという地域診断・発展への力などを挙げている⁷⁾。

ここに、子育て支援の本質を問う大変興味深い文献がある。野池（2008）らは、子育て支援事業の実践記録内容から、保育と支援の交わる時を整理し、保育と支援の会合う所には、「育ちの連鎖」があるということ述べている。具体的には、「園児にふれ、園の環境や文化にふれていくうちに、子どもが育ち、子どもの姿に親が育ち、親子の姿に保育者が育ち、保育者の育ちの中に保育園が育ち、保育園が評価され社会に価値を発信していくことで、地域が育つという

流れである。そして、親の育ちとして、次のようなことを述べている。保育園児と広場や園庭、クラス、公園などで出会った利用者である親は、聴いたり読んだりした子どもの姿ではなく、生の子どもの姿を目のあたりにして、子どもの本来の姿に気づく。色々な子どもがいることに安心をする。保育士の子どもへの接し方を見て気づいたり安心したりする。やがてわが子が園児に刺激されて自らやろうとする姿を見て、その変化に驚き喜ぶ。子どもの力を信じて待てる気持ちの余裕が出る。気づいたことを自分でも（家庭でも）やってみようと思う。子どもをその気持ちを理解して汲み取ることができるようになっていく。親はわが子が群れの中で成長していく姿に育てられていくのだと実感していく。子どもを理解するようになり、その行動を尊重し見守る気持ちの余裕が出てくると、子育ての負担感が軽減されるようになり、「自分も何かやってみたい」という力が湧いてくるのではないかと⁸⁾。

Y 短期大学では、平成 16 年度より、地域子育て支援研究所が設立され、平成 22 年度からは、地域の親子が週に数回自由に来校して支援を受けることが出来る子育て支援施設を新設した。また同時に、同じ地域性に所在する私立保育園において、出張形式の地域支援を開始した。それらの支援を、2 名の新人支援者が展開しているのだが、それらの取り組みにおいて、それぞれの支援者達は、葛藤を抱きながらも、それぞれの課題を持ち、支援を行っている。この前者の支援は、いわゆる「つどいの広場」としての機能をしている。

大学で行われている子育て支援に関しても、いくつかの先行研究がある。その一つとして、柳瀬 (2010) は、大学における乳児期の親子を対象とした子育て支援グループ活動について「ひろば」という活動形態に注目し、親支援・家族支援という視点から大学ならではの「子育て支援グループ活動」と「子育てひろば」のあり方についての探究を試みた。その結果、乳児期の子育て支援に対する親のニーズは高く、また 0 歳から 3 歳未満という、発達面において幅も個人差も大きい乳児期の子ども達にとって、「ひろば」という比較的自由度の高い「場」で集団で過ごす意味は大きく、そこで安定したメンバーでグループ活動を体験として積み重ねていくことは、大人にとっても子どもにとっても大変有意義なことであることを述べている⁹⁾。

本研究では、以上のような先行研究を受けて、実際に Y 大学が運営している子育て支援に関して、新人支援者を対象に実施した継続的な質問紙調査を通して、その回答や記述から、新人支援者の経月比較にみる、支援を通じた心理的变化を明らかにすること、また、それらの経月比較を通して、支援における課題を明らかにすることを目的とした。

II 対象・方法

1. 対象

対象は、X 府 Y 短期大学において、平成 22 年度より新設した上記の子育て支援施設において、子育て支援の担当者として勤務している者 2 名である。

新設した子育て支援施設（つどいの広場）は、月曜日・水曜日・金曜日を実施しており、地域の親子が自由に来校して支援を受けることが出来る。利用料は無料である。

当施設において支援を受けることが出来る者は、6ヵ月から3歳までの子どもとその親族等である。

また、2名の支援者は、これらの大学における支援に加えて、勤務校と同じ地域に所在する私立保育園において、毎週に1回（土曜日）直接園に出向いて支援を行う、出張形式の地域支援を行っている。

以下に、両者の人物について、概略を述べる。

支援者A：20代半ば。知的障害者更生施設における常勤勤務経験がある。育児経験なし。

支援者B：20代前半。私立保育園における常勤勤務経験がある。育児経験なし。

2. 方法

5件法による選択式項目及び自由記述項目によって構成した質問紙調査法とした。

質問紙調査は、子育て支援施設が開始された月から1か月ごとに行い、新人支援者の変化をみることが出来るように、5ヶ月間継続的に実施した。

実施方法としては、各月の最終週に支援者2名に質問紙調査を手渡しし、一定の時間において記入を行ってもらおうという方法で実施した。その際、「アンケートはテストではないので、正直に、思うままに記入して下さい。」ということを伝えた。

III 結果

1ヵ月目から5ヵ月目までの調査において、それぞれの回における回答を、経月比較としてまとめる。

1. 経月調査にみる支援者の変化－1（選択式回答）

表1 支援者Aの回答

	1ヵ月目	2ヵ月目	3ヵ月目	4ヵ月目	5ヵ月目
子どもに対して、愛情を感じる	大変感じる	大変感じる	大変感じる	大変感じる	やや感じる
親に対して、愛情を感じる	やや感じる	やや感じる	やや感じる	大変感じる	やや感じる
子どもの痛みや涙に直面すると、自分もつらくなったり悲しくなったりする	大変する	大変する	大変する	ややする	ややする
親の悩み等を聴いたりすると、自分のことのように考えてしまう	大変する	大変する	大変する	ややする	ややする
子育て支援をしている自分は好きだ	大変好きだ	大変好きだ	どちらでもない	どちらでもない	やや好きだ

子どもの喜怒哀楽に応じて、柔軟に対応出来ていると思う	やや思う	やや思う	やや思う	やや思う	やや思う
親の喜怒哀楽に応じて、柔軟に対応出来ていると思う	やや思う	大変思う	あまり思わない	やや思う	やや思う
支援することに対する喜びを感じる	大変感じる	大変感じる	あまり感じない	やや感じる	大変感じる
同室している子どもの様子を見ると、その子どもが考えていることや気分の調子等が分かる	やや分かる	やや分かる	やや分かる	やや分かる	大変分かる
同室している親の様子を見ると、その子どもが考えていることや気分の調子等が分かる	大変分かる	やや分かる	やや分かる	どちらでもない	やや分かる
支援している時、自分らしく(自己一致)していると感じる	大変感じる	やや感じる	どちらでもない	どちらでもない	大変感じる
どのような子どもや親に対しても、分け隔てなく肯定的に関わることが出来ていると思う	あまり思わない	やや思う	あまり思わない	やや思う	やや思う

表 2 支援者 B の回答

	1 カ月目	2 カ月目	3 カ月目	4 カ月目	5 カ月目
子どもに対して、愛情を感じる	大変感じる	大変感じる	大変感じる	やや感じる	大変感じる
親に対して、愛情を感じる	やや感じる	やや感じる	やや感じる	やや感じる	やや感じる
子どもの痛みや涙に直面すると、自分もつらくなったり悲しくなったりする	大変する	大変する	大変する	大変する	ややする
親の悩み等を聴いたりすると、自分のことのように考えてしまう	大変する	大変する	大変する	ややする	大変する
子育て支援をしている自分は好きだ	どちらでもない	やや好きだ	やや好きだ	やや好きだ	やや好きだ
子どもの喜怒哀楽に応じて、柔軟に対応出来ていると思う	あまり思わない	やや思う	どちらでもない	あまり思わない	どちらでもない
親の喜怒哀楽に応じて、柔軟に対応出来ていると思う	あまり思わない	どちらでもない	どちらでもない	やや思う	どちらでもない

支援することに対する喜びを感じる	やや感じる	やや感じる	やや感じる	やや感じる	大変感じる
同室している子どもの様子を見ると、その子どもが考えていることや気分の調子等が分かる	やや分かる	どちらでもない	あまり分からない	やや分かる	やや分かる
同室している親の様子を見ると、その子どもが考えていることや気分の調子等が分かる	あまり分からない	どちらでもない	どちらでもない	やや分かる	どちらでもない
支援している時、自分らしく(自己一致)していると感じる	どちらでもない	やや感じる	どちらでもない	大変感じる	やや感じる
どのような子どもや親に対しても、分け隔てなく肯定的に関わることが出来ていると思う	あまり思わない	やや思う	どちらでもない	やや思う	やや思う

2. 経月調査にみる支援者の変化-2 (エピソードを含む自由記述)

(1) 子どもに対する支援に関する自己評価

支援者 A

- 1 ヲ月目：あまりできていないと思う。初めての場所ではがちがちに緊張していた子どもに対しては上手に関わっていないから。近づいただけで泣いてしまう子どもには遠くから見守る程度しか出来ていない。
- 2 ヲ月目：場慣れしていない人見知りをする子どもとはあまり関わることが出来ていない状態なので、子ども全員に支援は出来ていないと思う。
- 3 ヲ月目：支援らしいことは全然出来ていない。子どもと一緒に遊ぶお姉さんだったり、部屋の管理人だったりとして危険がないか見ながら作業（事務仕事）をしている時に、「これでいいのかな」と感じる時がある。
- 4 ヲ月目：一緒に遊ぶことしか出来ていないため、子ども達には何も支援出来ていない。
- 5 ヲ月目：どこまで支援して良いのか、限度に悩む。ただ、あくまでも「子どもと一緒に」の立場を心がけている。(Ex.一緒に〇〇を試みる)

支援者 B

- 1 ヲ月目：保育園で働いていた自分の意見を通じて子ども達にも接することが出来ていると思う。ただし、親も一緒にいるという環境が初めてだったため、どこまで怒って良いのか分からないこともある。
- 2 ヲ月目：何回も来てくれている子どもは、「センセイ～！」と来てくれたり、乳児でも顔を見せるとニコッと笑ってくれたりする。ただ、悪いことや危険なことをして怒ったりすると、次回来た時も覚えているのか、少し避けられたりすることに戸惑い難しい。

- 3 ヲ月目：自分自身が、知っている（顔馴染みでよく来られる）子どもさんのところへ行ってしまう可能性が高いと感じる。
- 4 ヲ月目：声かけは増えていると思うが、一人ひとりに対するとなると、話していない子どもと話している子どもの差が激しいと思う。
- 5 ヲ月目：最近、子ども達の方から近づいて来てくれる子どもも多くなり、自分のことを好いてくれる子ども以外からも、子ども達の方から声をかけてくれるようになった。

(2) 親に対する支援に関する自己評価

支援者 A

- 1 ヲ月目：親の悩みを解決するための支援はあまり出来ていないと思う。自分自身が子育てや保育園での就職経験がないから。知的障害者更生施設で学んだ「何がマッチするか分からないから様々な案を集めて試してみる。人と比べる必要はない。」ということは伝えている。
- 2 ヲ月目：何一つ出来ていないと思う。子育てのことも、親の方が詳しかったり、悩みに対して共感・励ましは出来ても、根拠となるネタを持っていないから。親の変化（髪型・体調・服装など）は気付いたら言うようにしている。
- 3 ヲ月目：親一人ひとりが思っていること、考えていることが違うので、誰かに合やすことが出来ず、結局何も出来ていない。しかし、力になりたいという思いはずっと心の中にあるため、何も出来ていない自分に虚しくなる。
- 4 ヲ月目：親から「また行こうかな」と思ってもらうために、趣味・テレビなどの話で雑談し、和む雰囲気になるよう気を付けている。また、リピーターも大事にしつつ、初回の方には特に気にしながら、沢山話しかけるようにしている。この考えが合っているかも不確かであるので、現在試行中。
- 5 ヲ月目：話を聞いて、親自身も心から安らいだり笑ったりして頂き、息抜きをしてもらえりような環境作りを心がけている。

支援者 B

- 1 ヲ月目：保育園の仕事では、親とはなかなか会わないので、戸惑いが多い。しかし、親の方々から、特に乳児に関する発達や成長について聞かれ、自分の知識の範囲で答え、分からない時は調べて教えてみたりしている。
- 2 ヲ月目：顔見知りになった親とは、子どもの相談から自分達の悩み事も聞いてくれたりする。自分自身、普通に世間話をしているだけなので、それだけで支援が出来ているのかは分からない。
- 3 ヲ月目：よく悩み事を相談されたりする。きちんと対応出来ているかは不安だが、質問に答えることが出来ていると思う。
- 4 ヲ月目：自分自身が以前勤めていた保育園のことに興味を持つ方がおり、保育園ではどのよ

うな対応をしているのかなどの相談が多くなった。

- 5 ヶ月目：自分自身が以前は保育園で勤めていたということを知ってくれている親から、特に3月という季節という季節もあり、保育園でのトイレトレーニング・食事・布団などについて話を聞かせて欲しいとの要望があった。全てに十分答えられたかは分からないが、経験をもとに役に立てたかと思う。

(3) 支援中での戸惑い・分からないこと・必要性など

支援者 A

- 1 ヶ月目：子どもに何か伝えたい時（他の子どもに手を出してしまった等）、どこまで介入して良いのか。また、親がイライラしてきた時は、どのように間に入るか（タイミング・声かけなど）。そして、間に入った時は余計なことをしていないかと戸惑う。
- 2 ヶ月目：大学や前職（知的障害者更生施設）で学んだことはあくまでも知識で、自分自身が子育てを経験したことがないため、支援するには何も言えない時もある。育児書・教科書を読んだり、幼児教育科の大学教授から学んだりするだけではなく、セミナーや勉強会に参加しないといけないと思う。
- 3 ヶ月目：家庭での教育、しつけなどに関して、どこまで口をはさんで良いものか、また、親御さんへの伝え方などが分からない。公共の場での親の子どもへの対応など。
- 4 ヶ月目：2歳前の子どもに「どうぞ」の練習をしている際、思い通りにならなくて途中で泣いてしまった。「これだけは伝えたい」と思っているのに泣いている子どもにどう対応（どこでやめたら良いのか）するのか分からなかった。
- 5 ヶ月目：子育ての経験者がいたら良いなと思う。

支援者 B

- 1 ヶ月目：初めての親子参加の仕事なので、子どもに対する対応の仕方が違うので戸惑う。何度か単独で来ていた親がこの場で知り合いになり連絡先を交換して一緒に来る姿を見ると、このような場があること自体が良いのだと思った。
- 2 ヶ月目：子どもに対しての注意の仕方が分からない。保育園だと、顔を自分の方へ向けさせ注意するが、親がおられるので、どこまで注意して良いのか分からない。
- 3 ヶ月目：子ども達が、日常的に自然に身に付けていくことなのかと思うようになってきた。
- 4 ヶ月目：子ども自身に自ら考えるようにさせることが難しい。
- 5 ヶ月目：親がお手洗いなどでその場からいなくなった時の子どもへの対処法。壁面や声かけで話を変える以外分からない。手遊びも同じようなものばかりをしてしまう。

(4) 支援中での喜び・やりがい・意義を感じること

支援者 A

- 1 ヶ月目：何回も来て下さる家族で、子どもの小さな成長を親から聞いたり、自分の目で見た

時、涙が出るくらい嬉しい。この瞬間にやりがいを感じる。

- 2 ヲ月目：支援を通して子どもの成長が見られた時。(〇〇が出来るようになった、物の貸し借り、健康に育っているなど)
- 3 ヲ月目：たまに関わる子育て支援の職員だからこそ、子どもの小さな成長には感動する。「どうぞ」が出来る、立ちが出来る、一人歩きが出来るなど)
- 4 ヲ月目：親子の笑顔や、「ありがとう」「楽しい」など、実際に言ってもらえた時、幸せな気持ちになる。
- 5 ヲ月目：前回同様

支援者 B

- 1 ヲ月目：子どもの成長を見ると嬉しい。歩けなかった子が、足を一步步ずつ出して歩いている姿を見たりすると、一緒になって喜び、それが親の一つの意欲として私達により心を開いてくれると良いと思う。
- 2 ヲ月目：一つの事を一緒に達成出来ると、子どもから「ありがとう」などを言われたり、乳児ならほほえみかけてくれたりすることが嬉しい。
- 3 ヲ月目：こちらからアドバイスをさせてもらったことが出来るようになった時、心から嬉しい。
- 4 ヲ月目：子どもに顔を覚えてもらったり、先生と呼んでくれたり、親の方から相談された時。
- 5 ヲ月目：自分自身が対処を教え、その方法で癖などが治りましたと声をかけてきて下さる時はとても嬉しい。

(5) 子育て支援をしていて思うこと、感じること、考えること

支援者 A

- 1 ヲ月目：お一人で来られて周りのママさん達と馴染めずポツンと座っておられる方には、積極的に関わるようにしているが、ママさん同士が話せるきっかけを作れたらいいなと思う。来られた方全員が楽しんでもらえるように、子どもや親に積極的に話しかけたり、本気で遊んだりしているが、他に何か提供出来ないかと悩んでしまう。親に「学生さん?」「実習で来ているの?」と聞かれることが多いため、親が子どもを預けても安心して頂けるような人材にならないといけないと思う。今以上に言動に対して責任を持って取り組もうと思う。子育て支援は子どもや親のことをよく考えている取り組みで、子育てをされている家族の応援・支援をしているので、人件費や資産の援助をもっとしても良いと思う。
- 2 ヲ月目：他が主催している子育て支援では、子育てが一段落された方がされているので、親達はそちらの方が安心すると思う。子育て支援は、世の中の子育て事情によく似ていると最近思う。子育てに関わる人達が熱くて、市や行政はきちんと考えてくれているのかなと思う。問題ごとを皆で深く考えていかないと、親達はどこに行っても

気まずい思いをしているだけのような気がする。ただでさえ子育てに悩みは尽きないと思うので、もっともっと世の中の親を支えていかなければいけないと思う。

- 3 ヲ月目：他者との関わりにおいて目を離せない子どもがいて、その子どもを見ながら他の子どもと関わっていたら、音楽会の時のアンケートに「皆平等に接するように！」と書かれていた。親子と関わることも音楽会のイベントをすることも怖くなった。子育て支援の職員としての立場や責任が分からなくなった。また、「せんせい」と言いながら子どもから近付いて来てくれる時、親が笑ってくれた時は嬉しいが、親の反応や表情がとても気になるし、自分自身も楽しんでいのかなと思ってしまう。
- 4 ヲ月目：保育園などの施設と違って園の方針などが本施設にはないため、親一人ひとりの考えやニーズがあり、親同士その考えが違うこともある。今までの4ヶ月間は、「なるべく沢山のの人に喜んでもらうように」と思って、一つひとつの意見に応えるようにしていたが、反する意見や高度な技術を要するニーズに疲れてきた。(燃え尽きました。) そんな時、初心に戻って思うことは笑顔の重さ。嬉しそうに笑う子どもの笑顔に元気をもらった。
- 5 ヲ月目：同じ年代の子ども達が集まることによって、子どもや親同士の関わりが増え、また両者の会う機会が増えるごとに聞こえてくる話の内容や話し方が親密になっていく様子が伺える。中には人数の多さが嫌で、親自身が周囲の人と関わろうとしない方もいる。完全に孤立してしまわないよう、間に入って間接的にでも関わる事が出来るよう心がけている。

支援者 B

- 1 ヲ月目：子ども達の笑顔を見て、とても癒されている。子どもと遊ぶ他にも仕事があつて、その仕事が大変でも、やりたいと思う。自分自身に合っているかは分からないけれど、自分なりに一生懸命やっているつもりである。
- 2 ヲ月目：自分自身がどのように役に立っているのか正直分からない。しかし、リピーターの方が沢山おられ、それだけでこんな感じで良かったのかなと少し嬉しくなる。音楽会や行事の時は、沢山の人が部屋に入らなくなる位いらっしゃるのに、それ以外や保育園での支援においては、人が来ないので、そこをどうにかしたい。
- 3 ヲ月目：こんな私でも役に立てたことにびっくりしている。そして、自分自身がどれだけ変わってきているか分からないが、少しでも成長出来ていれば良いと思う。
- 4 ヲ月目：今の自分自身で、きちんと対応が出来ているのが不安。
- 5 ヲ月目：自分自身に合っている職種なのかあまり分からないけれど、とりあえず契約の期間はやり切ろうと思う。

IV 考察

本節では、初めに、1. の結果に関して、1 ヲ月目から5 ヲ月目までの調査において、それ

ぞれの回における回答を、経月比較をしながら考察する。

支援を開始してからの支援者の変化として、支援者 A と支援者 B に共通してみられた傾向として、次の 3 点を挙げる事が出来る。まず 1 点目に、支援を開始した頃は、目の前の子どもの困った場面等に対する心的反応が子どもと同様かつ強い傾向にあるが、支援を重ねるにつれ、少しずつ弱まる傾向にある。このことは、少しずつ良い意味での距離感が出来ていくことを示唆していると推察される。2 点目に、支援を重ねるにつれ、子どもや親に対して分け隔てなく肯定的に関わることが出来ていると感じる傾向にあるということである。これは、経験を通して、全体を見るゆとりが出来ていくということを示唆していると思われる。3 点目に、支援をしている中で、5 ヶ月を通して、自分らしく自己一致していると感じる感覚は、常に揺れ続け、それは、他の変化のどの視点よりも顕著であるということである。

次に、2. の結果に関して、(1) から (5) までのそれぞれの結果から考察を行い、その後、全体考察を行うこととする。

まず初めに、(1) 子どもに対する支援に関する自己評価であるが、支援者 A と支援者 B に関するそれぞれの回答から、1 ヶ月目から 5 ヶ月目まで、全体的に子どもに対する自己評価が低いことが分かる。支援者 A の回答に注目してみると、「支援らしいことは全然出来ていない」「子ども達には何も支援出来ていない」などのように低い自己評価が明らかになっており、支援者 B の回答に注目してみると、「悪いことや危険なことをして怒ったりすると次回の子どもの反応に戸惑い難しい」「話していない子どもと話している子どもの差が激しいと思う」などのように、こちらも課題を感じながら支援を行っていることが明らかになっている。ここで注目すべき視点として、子どもに対する支援に関する自己評価において両支援者に共通した視点として、「どこまで支援して良いのか・どこまで怒って良いのか」などのような、「限度」について戸惑っているという点である。

次に、(2) 親に対する支援に関する自己評価であるが、支援者 A と支援者 B のそれぞれの回答から、初めの 2~3 ヶ月は、自己評価が低く、その後、少しずつ自己評価が高くなっていくことが分かる。支援者 A の回答をみると、1 ヶ月目から 3 ヶ月目まで、「支援はあまり出来ていないと思う」「何一つ出来ていないと思う」「結局何も出来ていない」という回答が続くが、その後、「～を気を付けている」「現在試行中」「心がけている」などのように、自分なりに課題や解決法を見つけ、前向きに取り組もうと努めている姿がうかがえる。また、支援者 B の回答をみると、初めの 1 ヶ月目は、親と同席の仕事に戸惑いを感じ、2 ヶ月目は「それだけで支援が出来ているかは分からない」と感じているものの、3 ヶ月目からは、親から相談されることも増え、それに対して支援していることへの達成感を感じていることがうかがえる。(1)

(2) の結果より、子どもに対する支援に関する自己評価よりも、親に対する支援に関する自己評価の方が、全体を通して自己評価が高めであることが明らかになった。これは、筆者が推測していた考えとは異なった結果であった。

(3) 支援する中での戸惑い・分からないこと・必要性などについてであるが、支援者 A と支援者 B のそれぞれの回答を、同じ内容やカテゴリーにより分類してみると、次の 5 つに分類することが出来る。①子どもへのしつけや注意の仕方、②親への介入の仕方やしつけなどの伝え方、③どこまで口をはさんだり注意をしたりしても良いのか、④育児経験のなさ、⑤日常場面の子どもの関わり方の工夫（親がお手洗いなどでその場からいなくなった時の子どもへの対処法など）である。②に関して、「親が徐々にイライラしてきた時は、どのように間に入るか（タイミング・声かけなど）」という回答にもあるように、子育て支援は、直接的に子どもや親の一方に介入するだけではなく、支援者－子ども－親という 3 者間の関わりの中で、支援者以外の 2 者（子ども－親）に対して介入することが必要である。子育て支援は、個人を対象とした支援ではない為、支援の対象がほとんどの場合、親子単位である。その支援における関わりの中で、親子ひいては家族の関わりが反映されてくるのである。そこで、親と子が、子育てにおいて繰り広げる母子関係や、親子関係などの関係性を共有し、支援者がどのように関わるのかということは、難しい視点であると思われるが重要な視点であると考ええる。この意味でも、広い視点と気持ちを持ち、関わることを求められると言える。

(4) 支援する中での喜び・やりがい・意義を感じることにに関して、支援者 A と支援者 B のそれぞれの回答から同じ内容やカテゴリーにより分類してみると、「子どもの成長」を感じた時という内容が最も多かった。次に多い内容としては、親子の笑顔や乳児のほほえみかけ、「ありがとう・楽しい」の言葉などの良い感情を頂いた時である。また、育児法や対処法をアドバイスしたことが出来るようになったり癖が治ったりしたという報告を頂いた時という内容も多かった。「子どもの成長」という視点に注目してみると、それは大きなものではなく、日々の生活の中で少しずつ出来るようになった「小さな」成長である。支援者 A の回答に、「たまに関わる子育て支援の職員だからこそ、子どもの小さな成長には感動する」とあるが、育児で毎日離れることなく子どもと関わっている親では気付けなかったり感じられなかったりする小さな変化や小さな成長に、客観的かつ豊かな感性でもって敏感にそれを見つけ、感動し、それを子どもや親に伝え、喜びを共感するということが、子育て支援の意義のひとつであると考えられる。

(5) 子育て支援をしていて思うこと・感じること・考えることであるが、それぞれの支援者が、不安や課題を抱きながらも、前向きに情熱を持って、取り組んでいる姿が明らかとなった。まず、不安な感情などの視点から分析してみると、親よりも年齢が若く子育て経験のない支援者が、親との関わりや親からの発言によって、自信を失うということが出来るようである。確かに、他の子育て支援施設においては、子育てを一段落して、その子育て経験をもとに支援に携わっている者も多い。しかし、若くて子育て経験のない支援者であることのメリットもあるはずである。例えば、経験をしていない分、先入観なく関わり、上から教えるという姿勢はないであろうし、瑞々しい感性でもって親子に関わる事が出来、経験のなさを専門知識等で補おうと努めるのであれば、より最新かつ正確な情報を与えることが出来るのである。次に、親の反応や表情が気になるという視点や、きちんと対応が出来ているのかという不安もあるよ

うだ。そして、子育て支援施設としてのシステムの課題が挙げられる。具体的には、支援を行っていく上で必要だと感じる人件費や資産の援助の必要性や、施設としての規定等を定めていないことによる支援を展開していく上での戸惑いである。これら双方の背景には、親からのニーズがあると推測される。ニーズをどこまで受け入れるのかということは難しい視点であると思われるが、「反する意見や高度な技術を要するニーズに疲れてきた（燃え尽きました）」という支援者 A の回答からも危惧されるように、ある程度の規定や制限を決めておくことが必要であり、それを親にも理解してもらうという努力も必要であるようだ。支援者-親という双方の思いの理解は、より良い支援をしていく上で、必要なことである。しかし、以上のような不安や課題はあるものの、支援者 A は、1 ヶ月目で考えた、「ママさん同士が話せるきっかけを作れたらいいな」という視点で取り組み続け、5 ヶ月目で、「親同士の関わりが増え、また両者の会う機会が増えるごとに聞こえてくる話の内容や話し方が親密になっていく様子が伺える」ということを実感するに至っている。数ヶ月の取り組みの努力により、支援者の中でも達成感を感じ、そのような積み重ねが支援者としての自信を形成していくのだと推測する。また、支援者 B は、1 ヶ月目から 5 ヶ月目まで、「自分自身に合っているのかは分からない」という感情を抱きながらも、自分なりに一生懸命取り組んでいるという自己肯定感を感じながら、自分自身の成長を楽しみにする姿が推察される。新人支援者として、不安な感情を支え、自信に変えていくきっかけを与えるものは、リピーターであったり、子どもや親の反応であったりするようだ。

本研究より明らかになったことをもとに、新設子育て支援施設における新人支援者の課題をまとめると、大きく分けて以下のようなになる。まず 1 点目に、「支援の限度の基準化」（どこまで支援して良いのか・どこまで怒って良いのか・ニーズをどこまで受け入れるのか等）をしておくことである。2 点目に、「支援を行う上で必要な知識や実務の習得及び向上」（子どものしつけや注意の仕方・親への介入や相談された内容への返答・育児経験のなさをカバーする知識・日常場面における子どもの興味関心を惹きつける方法等）である。3 点目に、「実態から見えてくる支援におけるシステム作り」（支援を行っていく上で必要だと感じる人件費や資産の援助の必要性等）である。

今後は、本研究で明らかになった結果と課題を還元し、動き始めた新しい子育て支援施設の発展に、少しでも寄与していきたい。

引用文献

- 1) 臨床心理士子育て支援合同委員会（2010）『臨床心理士のための子育て支援基礎講座』創元社，p.183.
- 2) 『子育て支援と心理臨床』編集委員会（2010）分担執筆石橋英宣による「『子ども・子育てビジョン』について」子育て支援と心理臨床 vol.1，福村出版株式会社，pp.94-98.
- 3) 藤崎真知代・本郷一夫・金田利子・無藤隆編（2005）第 6 章分担執筆勝浦範子による『育

- 児・保育現場での発達とその支援』ミネルヴァ書房， p.100.
- 4) 大豆生田啓友・太田光洋・森上史朗編（2008）分担執筆大豆生田啓友による『よくわかる子育て支援・家族援助論』ミネルヴァ書房， pp.4-5.
 - 5) 片川智子ら（2003）『<子育て支援>事業の課題を探る』保育の実践と研究 Vol.8, pp.46-54.
 - 6) 無藤隆ら（2005）『子育て支援に関する研修のニーズ及び評価についての調査研究報告書』子ども未来子育て支援研究会， pp.129-131.
 - 7) 6) 同掲書， pp.134-135.
 - 8) 野池みどりら（2008）『2008 年子育てセンター実践記録 “保育と支援の交わる時”』子育て支援センター実践研究会， pp.72-74.
 - 9) 柳瀬洋美（2010）「大学における乳児期・子育て支援グループ活動Ⅰ－親支援・家族支援の場としての“子育てひろば”－」東京家政学院大学紀要第 50 号，東京家政学院大学， pp.1-12.

参考文献

- ・ 平田美智子（2010）「子育て支援者への支援を考える－インタビューを中心に－」和泉短期大学研究紀要，和泉短期大学
- ・ 小伊藤亜希子・室崎生子編（2009）『子どもが育つ生活空間をつくる』かもがわ出版
- ・ 中田周作（2008）「保育者養成への社会的要請に関する自由記述の分析」中国学園紀要，中国学園大学
- ・ 大豆生田啓友（2005）「地域の子育て家庭への支援に関する一考察：子育て支援者へのアンケート調査から」関東学院大学人間環境学会紀要，関東学院大学
- ・ 汐見稔幸・佐藤浩樹・大日向雅美・小宮信夫・山縣文治監修，大日向雅美編集代表（2008）『地域の子育て環境作り “子育て支援シリーズ”』3，ぎょうせい
- ・ 馬見塚（2009）「学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的变化とひろば自体の変化に関する考察（その1）」京都文教短期大学研究紀要，京都文教短期大学
- ・ 柳瀬洋美・中村洋子・鈴木百合子（2008）「大学における幼児グループ活動の展開Ⅱ－親グループ活動にみる個と集団の相即的發展－」東京家政学院大学紀要第 48 号，東京家政学院大学